

夏目漱石集
(一)

日本文学全集 13



筑摩書房

日本文学全集**13** 夏目漱石集(一)

昭和四十五年十一月一日発行

著者 夏目漱石

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一—七六五一(代表)
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

夏目漱石集(一) 目次

吾輩は猫である

五

坊っちゃん

二七四

草枕

三四八

倫敦塔

四三五

夢十夜

四三八

現代日本の開化

四五四

私の個人主義

四六八

人と文学

唐木順三
四六〇

夏目漱石集
(一)

虞美人華

一

健分遠いね。

元来何

所より登

るが。

と一人ふ

て

話と

ふ

さ

留つ

何所

に

別れ

せん

何

所より

つたつて

同じ

山は

あ

見

入て

うんだ

と数も

四

来

男

不

難作

はをへ

至

中

下

留

留

可

吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頃と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャー／＼泣いて居た事又は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くそれは書生といふ人間中で一番獯惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとは思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ／＼した感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間といふものゝ見始であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるして丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会はした事がない。加之顔の真中が余りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ふう／＼と煙を吹く。どうも咽せばくて実に弱つた。是が人間の飲む煙草と

いふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生は居ない。沢山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそ／＼這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向ふに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に来てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。其内池の上をさら／＼と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて来た。泣き度でも声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をしてそり／＼と池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸

内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偕郎へは忍び込んだものゝ是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でも一刻も猶予が出来なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つて居つたのだ。こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさ目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這ひ上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此間おさんの三馬を偷んで此返報をしてやつてから、やつと胸の病が下りた。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて此宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上つて来て困りま

すといふ。主人は鼻の下の黒い毛を捻りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は余り口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は減多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたがり殆んど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つて居る。当人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寐をして居る事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカザヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寐て居て勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚

だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寐をするときは必ず其背中に乗る。是はあながち主人が好きといふ訳ではないが別に構ひ手がなかつたから已を得るのである。其後色々経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい日は縁側へ寝る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入つてこゝのうちの小供の寢床へもぐり込んで一所にねる事である。此小供といふのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は殊に小さい方が質がわるい——猫が来た——といつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て杯は物指で尻べたをひどく叩かれた。吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等是我儘なものだと断言せざるを得ない様になつた。殊に吾輩が時々同衾する小供の如きに至つては言語道断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。而も吾

輩の方で少しでも手出しを仕様ものなら家内総がかりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸畳で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顛へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君杯は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の様な子猫を四足産まれたのである。所がその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四足ながら棄てゝ来たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤の議論と思ふ。又隣りの三毛君杯は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大に憤慨して居る。元来我々同族間では目刺の頭でも鱧の臍でも一番先に見付たものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて我等が見付た御馳走は必ず彼等の為に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄して居る。白君は軍人の家に居り三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に関すると両君よりも寧ろ楽天である。唯其日／＼が何うにか斯うにか送られ／＼ばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし様。元來此主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほしいが、投書をしたたり、新体詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、又あるときはブイオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも聞せず一向平氣なもので、矢張是は平の宗盛にて候を繰返して居る。皆んながそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考になつたものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわたとしく歸つて来た。何を買つて来たのかと思ふと水彩絵具と毛筆とワットマンといふ紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間といふものは毎日々々書齋で昼寐もしないで絵許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやらのか、さる日其友人で美学とかをやつて居る人が来た時に下の様な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもない様だが自ら筆をとつて見ると今更の様に六づかしく感ずる」是は主人の述懐である。成程許りのない処だ。彼の友

は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで画がかける訳のものではない。昔以太利の大家アンドレア、デル、サルトが言つた事がある。画をかくなら何でも自然其物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかゝうと思ふならちと写生をしたら」

「へえアンドレア、デル、サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。実に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた。

其翌日吾輩は例の如く縁側に出て心持善く昼寐をして居たら、主人が例になく書齋から出て来て吾輩の後で何かしきりにやつて居る。不図眼が覺めて何をして居るかと一分計り細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア、デル、サルトを極め込んで居る。吾輩は此有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲擲せられたる結果として先づ手初めに吾輩を写生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寐た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思つて、ちつと辛棒して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。脊といひ毛並といひ

ひ顔の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある様な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事実と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、去ればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寐て居る所を写生したのだから無理もないが眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寐て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア、デル、サルトでも是では仕様がなかつた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度と思つたが、先つきから小便が催ふして居る。身内の筋肉はむづ／＼する。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となつたから、不得已失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してありと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊はしたのでから、序に裏へ行つて用を足さうと思つてのそ／＼這ひ出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜた様な声をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に悪口の言ひ様を知らないのだから仕方

がないが、今迄辛棒した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼はり失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の脊中へ乗る時に少しは好い顔でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。少し人間より強いものが出来て来て窘めてやらなくては此先どこ迄増長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが吾輩は人間の不徳についてはよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ち好く日の当る所だ。うちの小供があまり騒いで樂々昼寐の出来ない時や、余り退屈で腹加減のよくない折坏は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かた／＼この茶園へと歩を運ばした。茶の木を根を一本／＼嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覚に寐て居る。彼は吾輩の近付くのも一向心付かざる如く、又心付くも無頓着なる如く、大きな鼾をして長々と体を横へて眠つて居る。他の庭内に忍び入りたるものが斯く迄平氣に睡られるものかと、吾輩は竊かに其大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に

抛げかけて、きら／＼する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる様に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる体格を有して居る。吾輩の倍は慥かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めて居ると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばら／＼と二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其真丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上に於つめて、御めえは一体何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろ其声の底に犬をも挫しぐべき力が籠つて居るので吾輩は少なからず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと険谷だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平氣を装つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大に輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。全てえ何こに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だらうと思つた。いやに瘠てるぢやねえか」と大王丈に氣焰を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思はれない。然し其膏切つて肥満して居る所を見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮して居るらしい。吾輩は「さう云ふ君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己れあ

車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒は此近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。然し車屋丈に強い許りでちつとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつて居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩は先づ彼がどの位無学であるかを試して見様と思つて左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどつちがえらいだらう」

「車屋の方が強いに極つて居らあな。御めえのうちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫丈に大分強さうだ。車屋に居ると御馳走が食へると見えるね」

「何におれなんぞ、どこの国へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。御めえなんかも茶晶ばかりぐる／＼廻つて居ねえで、ちつと己の後へくつ付いて来て見ねえ。一月とたゝねえうちに間違へる様に太れるぜ」

「追つてさう願ふ事に仕様。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る様に思はれる」

「篋棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだ様な耳を頻りとびく付かせてあら／＼かに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

其後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相

当の気焔を吐く。先に吾輩が耳にしたといふ不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例の如く吾輩と黒は暖かい茶晶の中で寝転びながら色々雑談をして居ると、彼はいつもの自慢話を左も新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。「御めえは今迄に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発達して居る積りだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たものの、此間に接したる時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとらうとらうと思つてまだ捕らない」と答へた。黒は彼の鼻の先からびんと突張つて居る長い鬚をびり／＼と震はせて非常に笑つた。元來黒は自慢をする丈にどこか足りない所があつて、彼の気焔を感じた様に咽喉をころ／＼鳴らして謹聴して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近付になつてから直に此呼吸を飲み込んだから此場合にもなまじい己れを弁護して益形勢をわるくするのも愚である、いつその事彼に自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君杯は年が年であるから大分とつたらう」とそのかして見た。果然彼は牆壁の欠所に咽喉して來た。「たんとでもねえが三四十はとつたらう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼は猶語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちつてえ奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷

い目に逢つた」「へえ成程」と相槌を打つ。黒は大きな眼をばちつかせて云ふ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて縁の下へ這ひ込んだら御めえ大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。此畜生つて氣で追つかけてとう／＼泥溝の中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うまく遣つたね」と喝采してやる。「所が御めえいざつてえ段になると奴め最後つ屁をこきやがつた。臭えの臭くねえのつて夫からつてえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼は是に至つて恰も去年の臭氣を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻はした。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を付けてやらうと思つて「然し鼠なら君に睨まれては百年目だらう。君は余り鼠を捕るのが名人で鼠許り食ふものだからそんなに肥つて色つやが善いのだらう」黒の御機嫌をとる為めの此質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息していふ。「考げえると詰らねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえ。人のとつた鼠を皆んな取り上げやがつて交番へ持つて行きあがる。交番ぢや誰が捕つたか分らねえから其たんびに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壱円五十錢位儲けて居やがる癖に、碌なものを食せた事もありやしねえ。おい人間てものあ体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒も此位の理窟はわかると見えて

頗る怒つた容子で脊中の毛を逆立てゝ居る。吾輩は少々氣味が悪くなつたから善い加減に其場を胡魔化して家へ歸つた。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも寝て居た方が氣楽でいゝ。教師の家に居ると猫も教師の様な性質になると見える。要心しないといふに胃弱になるかも知れない。

教師といへば吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩画に於て望のない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云ふ人に今日の会で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云ふが成程通人らしい風采をして居る。かう云ふ賀の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く余儀なくせられたと云ふのが適當であらう。あの人の妻君は芸者ださうだ、羨ましい事である。元來放蕩家を悪くいふ人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。是等は余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩画に於るが如きもので到底卒業する氣づかひはない。然るにも閑せず、自分丈は通人だと思つて澄して居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つたら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る理窟だ。吾輩の水彩画の如きはかゝ

ない方がましであると同じ様に、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又芸者の妻君を羨しい杯といふ所は教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画に於ける批評眼丈は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも閑せず其自惚心は中々抜けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと思つて、そこらに抛つて置たのを誰かゞ立派な額にして欄間に懸けて呉れた夢を見た。倍額になつた所を見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。是なら立派なものだと独りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覺めて矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつて仕舞つた。

主人は夢の裡迄水彩画の未練を脊負つてあるいて居ると見える。是では水彩画家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「画はどうかね」と口を切つた。主人は平氣な顔をして「君の忠告に従つて写生を力めて居るが、成程写生をすると今迄氣のつかなかつた物の形や、色の精細な變化杯がよく分る様だ。西洋では昔から写生を主張した結果今日の様に発達したものと思はれる。さすがアンドレア、デル、サルト

だ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア、デル、サルトに感心する。美学者は笑ひながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ謎はれた事に気がつかない。「何が」と君の頻りに感服して居るアンドレア、デル、サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じ様とは思はなかつたハ、ハ、ハ」と大喜悅の体である。吾輩は縁側で此對話を聞いて彼の今日の日記には如何なる事が記さるゝであらうかと予め想像せざるを得なかつた。此美学者はこんな好加減な事を吹き散らして人を担ぐのを唯一の樂にして居る男である。彼はアンドレア、デル、サルト事件が主人の情線に如何なる響を伝へたかを毫も顧慮せざるものゝ如く得意になつて下の様な事を饒舌つた。「いや時々冗談を云ふと人が真に受けるので大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達である学生にニコラス、ニッケルバーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、其学生が又馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰返したのは滑稽であつた。所が其時の傍聴者は約百名許りであつたが、皆熱心にそれを傾聴して居つた。夫からまだ面白い話がある。先達で或る文学者の居る席でハリソンの歴史小説セオファーンの話しが出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼気人を襲ふ様だと評したら、僕の向ふに坐つて居る知

らんと云つた事のない先生が、さう／＼あすこは実に名文だといつた。それで僕は此男も矢張僕同様此小説を読んで居らないといふ事を知つた」神經胃弱性の主人は眼を丸くして問ひかけた。「そんな出鱈目をいつて若し相手が読んで居たらどうする積りだ」恰も人を斯くのは差支ない、只化粧の皮があらはれた時は困るぢやないかと感じたものの如くである。美学者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違へたとか何とか云ふ許りさ」と云つてけら／＼笑つて居る。此美学者は金縁の眼鏡は掛けて居るが其性質が車屋の黒に似た所がある。主人は黙つて日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云はん許りの顔をして居る。美学者はそれだから画をかいでも駄目だといふ目付で「然し冗談は冗談だが画といふものは實際六づか敷ものだよ、レオナルド、ダ、ビンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教へた事があるさうだ。なる程雪隠杯に這入つて雨の漏る壁を余念なく眺めて居ると、中々うまい模様画が自然に出来て居るぜ。君注意して写生して見給へ屹度面白いものが出来るから」「又欺すのだらう」「いへ是文は慥かだよ。實際奇警な語ぢやないか、ダ、ビンチでもいひさうな事だあね」「成程奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。然し彼はまだ雪隠で写生はせぬ様だ。

車屋の黒は其後跋になつた。彼の光沢ある毛は漸々色が褪めて抜けて来る。吾輩が琥珀よりも美いと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつて居る。殊に著るしく吾輩の注意を

惹いたのは彼の元気の消沈と其体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら「いたちの最後尻と肴屋の天秤棒には懲々だ」といつた。

赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢の如く散つてつくばひに近く代る／＼花卉をこぼした紅白の山茶花も残りなく落ち尽した。三間半の南向の縁側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日は殆んど稀になつてから吾輩の昼寐の時間も狭められた様な気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠る。人が来ると、教師が厭だ／＼といふ。水彩画も滅多にかかない。タカヂヤスターゼも機能がなないといつてやめて仕舞つた。小供は感心に休まないで幼稚園へかよふ。帰ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食はないから別段肥りもしないが、先々健康で跛にもならず其日／＼を暮して居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌ひである。名前はまだつけて呉れないが、欲をいつても隙限がないから生涯此教師の家で無名の猫で終る積りだ。

二

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高感ぜらるゝのは難有い。

元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。是は彼の交友

某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗つて、其の真中に一の動物が躊躇つて居る所をバステルで書いてある。主人は例の書斎で此絵を、横から見たり、壁から眺めたりして、うまい色だなといふ。既に一応感服したものだから、もうやめにするかと思ふと矢張り横から見たり、壁から見たりして居る。からだを拗ち向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見る様にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持つて来たりして見て居る。早くやめて呉れないと膝が揺れて險呑でたまらない。漸くの事で動揺が余り劇しくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうと云ふ。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、先つきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寐て居た眼を上品に半ば開いて、落付き払つて見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人の様にアンドレア、デル、サルトを極め込んだものでもあるまいが、画家丈に形体も色彩もちゃんと整つて出来て居る。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫ぢやない吾輩である事が判然とわかる様に立派に描いてある。この位明瞭な事を分らずにかく迄苦心するかと思ふと、少し人間が気の毒になる。出来る事なら其絵が吾輩であると云ふ事を知らしてやりたい。吾輩であると云ふ事は好し分らないにしても、せめて猫であるといふ事は分らして遣りたい。然し人間といふものは到底吾輩猫属の言語を解し得る位に